

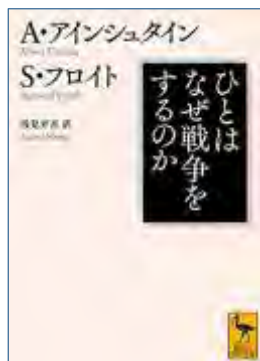
「戦争と平和！」

第 16 回

ひとはなぜ戦争をするのか

井上 幸夫

“人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか” この言葉は物理学者アルバート・アインシュタインが、今から 87 年前の



A・アインシュタイン(著)
S・フロイト(著)
浅見省吾訳
講談社学術文庫

1932 年 7 月心理学者ジグムント・フロイト宛に出した書簡のテーマです。彼は戦争の絶えない世の中を憂慮し、人はなぜ戦争を繰り返すのか、人の心の中にも問題があるのではないかと、憎悪と破壊という病に冒されないようにすることはできるのかと、フロイトに問うたのです。フロイトは、人間には本来保持統一しようとする生への欲動と、破壊し殺害しようとする死への欲動を併せ持

っている。それらが複雑にからみあって人を戦争や暴力へと駆り立てて来た。ために死への欲動だけを取り除いて、戦争を避けることなど出来そうにないが、一方文化（文明）の発展は心のあり方に変化を引き起こす。知性を強めること、攻撃本能を内にむけることで欲動をコントロールし始める。“文化（文明）の発展を促せば戦争の終焉へ向けて歩みだすことができる”こう結論づけています。(参照：「ひとはなぜ戦争をするのか」講談社 浅見省吾訳 2016 年発行)

平和を心から願っていた二人は手紙を交換してからほどなくナチスドイツの台頭により、ドイツから亡命、第 2 次世界大戦をみることになります。

私は 1947 年（昭和 22 年）8 月生まれのため自身の戦争体験はありません。戦争といえば故郷が田舎でしたから、子供のころ「カンサイキの弾が落ちていた」とか「ゼロセンの車輪を台車に使っている」とかの話を小耳にはさんだことや観光地で軍帽に白衣義手義足の男達が数人アコーディオンやハーモニカを吹き鳴らし佇立している様子が記憶に残っている程度です。

戦争という事柄を意識しだしたのは中学生の頃、たまたま家にあった古びた本を手にとったことからでした。「土と兵隊」「麦と兵隊」というノンフィクション小説です。従軍作家火野葦平が一兵士として、日中戦争に従軍し中国大陸

で戦っていく様を陣中日記風に描いた作品です。この本が私を戦争の疑似体験者となし、爾来アジアの戦争、政治、歴史に関して興味を抱かせる契機になったと思います。とりわけ日本が中国、欧米と戦争を始め、国家存亡の危機に至らしめた昭和史については、もっと深く学び直したいと思っています。

兵隊であった私の父は旧満州から、母方の叔父はシベリアから帰還できましたが、父方の叔父 3 名は南方で戦病死しました。日本は第二次世界大戦で 310 万人、中国は 1000 万以上の犠牲者が出ています。私が仕事の合間に中国で偶々見かけた戦争関連の事物。これらも歴史認識の一助になりました。満州事変勃発記念碑（満州事変・柳条湖）、満州国皇帝溥儀の政府庁舎（長春）、盧溝橋壁の弾痕（日中戦争・北京郊外盧溝橋）、上海杭州間の畑にあったトーチカ（上海事変）、蒋介石が軍閥張学良に軟禁された建物（西安事件・西安）、捕縛された姿の南京臨時政府汪兆銘夫妻の石像（日中戦争・杭州）など。私の手元に「所沢雑学大学 閉学記念誌」があります。所沢在住の村上二郎氏が主催した戦争経験者を講師に招き、その体験談を聞かせてもらう講座の終了記念誌です。1997 年から 2016 年までの 20 年間 355 回日曜日の午後、居眠り自由で無料でした。私の出席はわずかでしたが、高齢な講師の方々から貴重な体験談を聞くことができました。記念誌を頂いた時の村上氏のメモに「争いのない平和な社会を希っております」とありました。

戦後 74 年たちましたが、世界ではやむことなく戦争や紛争が勃発し、多くの人命が失われ続けています。大国は大量破壊兵器の発達で、もはやお互いの戦争は不可能であるにもかかわらず、自国の欲望に取りつかれ、陣取り合戦や軍備拡大に余念がないようです。我が国においては、日米安保条約が補強され海外派兵への道が開かれました。国防予算も年々増加しています。アインシュタインやフロイトは、もともと国を持たないユダヤ系でした。世界の国々が一堂に集う国際連合には期待を寄せるのでしょうか。過去に失敗した国際連盟から、文化の発展により、人々の知恵で成立した国際連合。かれらは国連に力を！とあの世で叫んでいるのかもしれませんが。